

歌を忘れたカナリヤへ

辰巳 くにか

歌を忘れたカナリアではないけど、パソコンで入力ばかりで漢字を書かなくなって20年も過ぎてしまいました。今では時々小学校の時に習った漢字さえも出てこなくなることがあります。70歳を過ぎ、時々自分のこれからに不安さえ覚えてしまいます。

「漢字の魅力を再発見する旅に出かけてみようと思う」。

友人に聞くとパソコンやスマホ等で調べたら必ずノートに書いているそうです。

パソコンの普及により、私たちの日常生活は大きく変化しました。便利な文字入力ソフトのワード等のおかげで、私たちは手軽にメッセージを送ったり、文章を作成したりすることができるようになりました。しかし、その一方で、漢字や文字を手書きで表現する機会は減り、私たちの漢字の知識や使い方も少しずつ失われていくように感じています。

かつて漢字を書くことは、時間をかけて練習し、美しく、また正確に文字を描く芸術でした。その感覚を取り戻すことは、今のデジタル時代においても意味のある挑戦ではないでしょうか。

漢字には言葉の奥深さや歴史の重みがあります。それぞれの漢字が持つ象形や意味は、その背後に様々な物語を秘めています。また、漢字を書くことは、思考を整理し、文字の持つ力を感じる機会でもあります。この感覚を失うことなく、再び漢字を書くことの大切さを改めて感じています。

今後、私はあまりパソコン入力に頼らず、手書きで漢字を書く練習を積んでいきたいと考えています。日常の中で少しずつでも漢字を使う機会を増やし、その魅力を再発見していきたいと思います。漢字の美しさとその奥深さを、20年の時を超えて取り戻す旅が、私の新たな挑戦となるでしょう。

でも そういいながらも私は、今パソコンで入力しています。この矛盾はなんなのでしょうね。こういうふうに思ったのは小学生の漢字さえ書けなくなった自分を見てしまったからなのです。

「百人一首と手書き漢字の復活」

私の漢字との再会は、百人一首という古典の世界から始まりました。その短い歌に込められた情緒と美しさは、手書きで詠むことでより深く感じるができると思います。

「秋の田の かりほの庵の 苫をあらみ わが衣手は 露にぬれつつ」

この歌の風情を味わうために、パソコンではなく、紙に漢字を書くことを選びました。最初は緊張感とともに始まり、次第にリズムが生まれ、文字が形成される瞬間、言葉の響きが感情の奥底に沁み込んでくるものを感じます。百人一首は、その短い歌に心を動かされるだけでなく、手で文字を書くという行為自体が一種の瞑想となりますね。今、私は20年のパソコン入力の便利さと、手書き漢字の味わい深さを比べてみようと思っています。一つは便利で速く、もう一つは手間がかかるがその分だけ深い満足感があるのではと思っています。

「詠んで書いて遊ぼう会」

百人一首の詠みは、私にとって新たな挑戦でもあり、手書き漢字の練習でもあります。この旅で、私は過去の美しさ、新しい発見を交互に感じることでしょう。仲間が出来ました！！百人一首を詠んで書いて遊ぼう会に仲間が一人二人と集まりました。けして強制しないで、忘れられた空間を一緒に埋めていき百人一首と手書き漢字の復活を願う「読んで書いて遊ぼう会」の仲間が増えていくことを切に願いながらこのエッセイを書いています。